

小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

7

Vol.46 No.7 JULY

2023

子どもの居場所2023

広がる小児看護の未来



佐藤聡美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第25回 おはじきの絶望

明日、算数セットのおはじきがいるらしい。8歳の息子が、家中、のべつまくなし探しても、残念ながら見つからなかった。そのとき、彼は涙を流しながら「こんな人生、もう嫌だ」と言って、玄関に向かって歩き出し、家出をしようとしたらしい。家人からの報告である。皆さんは可愛いエピソードだと言ってくれるかもしれない。しかし、私は子ども時代の終焉が近づいたと感じた。去年は、そこまで深刻に泣かなかったからである。

私は9歳の頃、当時としては珍しい、英会話の個人レッスンに通い始めた。初めて外国人と接した。白桃色の肌に、日に透けて輝く金色の髪の毛というのが何とも不思議であった。名前も思い出せないが、ポプヘアの大柄の女性で、米国のネブラスカ州出身だった。壁に貼られた米国の地図は、州ごとに水色や黄色と塗り分けられており、英語の文字とイラストが描かれた本や、机の上のきらきら光る雑貨に魅了された。その時間だけが、違う世界に行っているようであった。

ところが、私はあるとき、うっかりして英語の教材本を忘れてしまった。彼女の前で涙がポロポロこぼれてきた。怒られることを恐れるより、楽しみにしていたレッスンが体験できなくなると思うと、自分はなんて馬鹿な忘れ物をしたのだろう、と悔やまれて仕方なかった。さらに、刻一刻と時間は過ぎる。涙が止まらない自分自身にも困惑する始末である。それでも彼女

は怒らないどころか、苦い思いに縛られて身動きできない私を、大丈夫だと抱きしめてくれた。結局、向こうはプロフェッショナルで、教本が無くても、ホワイトボードで新しい単語を教えてくれた。彼女にとってたいしたことはなかったのかもしれないが、私はあの瞬間、確かに絶望したのだ。

このようなこともあって、おはじきが見つからないことで息子が絶望したとしても、私はわかる気がするのだ。それが自分の人生を自覚した瞬間であり、親離れの始まりであることも。

小児がんの治療を終えて、退院した女の子は外来で言った。「髪の毛が生えていないから、何か言われなにか心配だったよ。本当は。でも大丈夫だった」と。親御さんは「皆、小学生だからまだ大丈夫かな(髪の毛が生えていなくても、誰もいじめないだろう)、と、思っていました」と言う。

そういえば、彼女も8歳だった。周りの大人は子ども扱いするが、8歳はすでに絶望を知っている。大人が病名を隠しても、子どもは案外知っていて、大人に合わせて知らないふりさえしてくれる。そういう子どもたちのために、学校と交渉して、万全の準備を整えるのが大人の役目だと考える。

と原稿を終えようとしたら、息子のおはじきはなぜか新聞紙の間からぼろっと出てきた。世の中こんなものである。

佐藤聡美
さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。NPO法人エゴノキクラブ理事長。富山県出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。令和4年度大谷賞(日本小児血液・がん学会賞)受賞。